



Title	開発・ジェンダー・スポーツの節合
Author(s)	岡田, 千あき
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2021, 47, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79068
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

開発・ジェンダー・スポーツの節合

岡 田 千あき

目 次

1. はじめに
2. 開発とジェンダー
3. スポーツとジェンダー
4. 開発のためのスポーツにおけるジェンダー
5. おわりに

開発・ジェンダー・スポーツの節合

岡 田 千あき

1. はじめに

近年、スポーツの実施や観戦を目的とするのではなく、スポーツを手段として社会課題の解決を図る「開発のためのスポーツ (Sport for Development: SfD)」の概念が、国際開発やスポーツの実務・政策に活かされている。1990年代半ばから発展した分野であるが、日本でも東京五輪招致の際に「スポーツ・フォー・トゥモロー」の実施が約束され、SDGs (Sustainable Development Goals) へのスポーツの寄与も目指されている。スポーツ庁は、「人々に対し、スポーツが多様な社会課題の解決に貢献しうることの気づきを促し、SDGs の認知度を高め、意識・行動を変えるよう促す」としており、SfD の概念はコロナ禍後のスポーツを考える上でも重要になるであろう。

話は変わるが、社会の発展を目指す際の女性の役割への期待は、各国でおしなべて高まっている。開発分野においても「開発の大望は人類の半分が取り残されたままでは実現できない」[UNDP 2016] と言われており、UNDP 総裁は、ジェンダー不平等と女性差別に対処できなければ、SDGs を達成することは不可能であるとさえ明言している。

筆者はこれまで SfD の研究や実務に関わる中で無意識のうちにジェンダー的視点での事象の把握を避けてきたと感じている。逆の意味でのジェンダーバイアスへの留意や他のマイノリティへの視線、例えば民族や貧困、紛争や飢餓などの影響を受ける「社会的弱者」を重視するが故であったかもしれないし、「女性の同一性への反発」[荒木 2019 年、P.46] であったかもしれない。いずれにしても上野の「一見ジェンダー中立的な学問の『客観性』は、『女性の経験』を構造的に排除する効果をもつ」[上野 2013 年、P.5] との指摘が耳に痛い。ジェンダーへのまなざしの欠如を看過してきた一方で、開発途上国の現場で SfD 研究や実務を共に行うのは、多くの場合、「快活な」「自信に満ちた」「男性の」開発関係者やスポーツ愛好者であることに疑問を感じてきた。研究を進めていくうちに、SfD の研究と実践において見られる人種や階級、ジェンダーに起因する沈黙と不可視化 [Hayhurst 2018, P.601] の追究は不可避であり、SfD の議論を行う際の基盤となるべきという問題意識を有するに至った。

ジェンダースタディーズは、専門分野であると同時にすべての研究者・実務者が身にまとう必要がある基本的な視点を有している。また、開発学も多くの学術分野がより注

意を払い、強力なコミットメントが示されてしかるべき分野である。それにも関わらず、長い間、スポーツ科学研究の中でジェンダーや開発は周縁でしかなく、親和性が高いと考えられる SfD 研究においてもジェンダースタディーズはほぼ無視されてきた。Hayhurst[2014]、Chawansky[2011, 2015]、Oxford[2012, 2017] などを除くと「これまで、国際関係論のポストコロニアル・フェミニズム的視点はスポーツ学に応用されてこなかった」[Hayhurst 2018] 状況であり、同時に「スポーツは依然として国際関係の分析においては周縁に置かれており、今日までの出版の多くは国際関係学の領域外の学者によるもの」[Levermore et. al. 2013, P.220] であったことへも疑問符が付く。

「開発とジェンダー」「スポーツとジェンダー」については、ここ 20 年ほどの間にテーマが細分化しながら知見が蓄積されてきた。しかし、スポーツ、開発、ジェンダーとなると政策、実務はもちろん、スポーツ社会学、ジェンダースタディーズ、開発学などを見渡しても先行研究は数件のみに留まっている。そこで本稿では、SfD 研究にいち早くポストコロニアル・フェミニズムのアプローチを取り入れた Hayhurst の研究を中心に関連する議論を整理し、スポーツ、開発、ジェンダーの節合を探る。これにより、開発手段として扱われるスポーツをジェンダー的視点で再評価し、SfD の本質的課題を炙り出すことを試みたい。とは言え、壮大な目標であるため、まずは、「開発とジェンダー」「スポーツとジェンダー」に関する先行研究を概覧し、今後、フィールドワークを行う際の分析視覚を整理する。これらの分野の豊富な先行研究の中で、SfD 的興味・関心に沿ったものを抽出するため、理解の不足や偏りが生じることが予想される。これらの未熟な点へのご指摘をいただきたいのはもちろん、今後のフィールドデータの検証の過程でも柔軟に修正していきたい。

2. 開発とジェンダー

2-1. ジェンダーエンパワーメント

開発における女性という視点の誕生は 1960 年代と言われている[百瀬 2017 年、P.115]。それまで、開発の対象であっても主体でなかった女性が、第二波フェミニズムの隆盛やマイノリティ重視の潮流とリンクして「エンパワーメント」され、力を発揮する場が拡大していった。しかし、近年の開発分野では、「ふたを開けてみれば、この『エンパワーメント』は、いつの間にかプロジェクトー女性たちに少額融資を提供し、スモール・ビジネスを始めることと同義になってしまった」[中村 2010 年、P.111] と指摘されており、開発におけるジェンダーエンパワーメントの概念の再構築が求められている。

百瀬[2017] は、田中[2002] の類型を元に、開発とジェンダーの関係性の変遷を表 1 のようにまとめた。順を追ってみると、1975 年が国連女性年と定められる以前、第 1 回世界女性会議が開かれる前の開発分野においては、「女性に教育や収入がない、能力がないから問題解決が必要である」[石田 2019 年、P.115] とされる「開発と女性 (Woman in

Development: WID)」の考え方が主流であった。WID については、2000 年代に入り、「女性のみの状況を改善しようとする協力が増加してしまい、固定的な性別役割分業の見直しにはつながらず、女性の社会的・経済的な地位向上にはつながらなかった」[JICA 2009, P.5] と評された。

1979 年に国連で「女性差別撤廃条約」が採択され、それを受けて開催された第 2 回世界女性会議は「第三世界の貧しい女性たちが経済活動に参加することが促されれば、自ずと女性たちの公正な社会参加につながり、開発も効率よく進むであろうという前提に考えられたもの」[モーザ 1996, P.104] と説明されるように、女性の雇用・教育・健康に焦点を当てたものとなった。田中 [2002] のまとめを拝借すると、女性を開発における「人的資源」とみなし、①生産的な経済活動と再生産的な労働にあたる出産や育児を支援するための保健衛生、②生産的な能力が十分に発揮されるようにするための教育、の二つが重視されたものとされている。このような多方面での女性のエンパワーメントを促すアプローチは、「ジェンダーと開発 (Gender and Development: GAD)」と呼ばれ、「対象社会におけるジェンダー、男女の社会的役割や相互関係を理解し、社会的に不利な立場にある住民男女双方が社会的発言権を獲得して力をつけることを通じて、制度や政策を変革していくような開発を進める」[田中 2002 年、P.28] と説明された。女性の社会参加の場の拡大という正の側面があった一方で、すべて「人」を経済開発の資源とみなし、加えて「多くの政策においての女性の『エンパワーメント』は、ジェンダー平等それ自体の必要性ではなく、他の目標達成を容易に実現するための有効な手段として用いられている」[中村 2010 年、P.112] ものであった。効率化、自由化、民営化といった構造調整の波が押し寄せせる中で、ジェンダーエンパワーメントに関する議論は、開発において中心的な位置を獲得したがゆえに経済開発重視の渦に巻き込まれざるを得なかった。

表 1 開発と女性をめぐる国際社会におけるアプローチの変遷

発生年代	1950 年頃	1970 年頃	1975 年頃	1980 年頃	1985 年頃	1995 年頃
アプローチの種類	福祉	貧困撲滅	公正	効率	エンパワーメント	ジェンダー主流化
どのように表現されるのか	女性は保護すべき存在である	女性の自立は経済的自立で達成できる	女性の地位を男性なみに向上させよう	女性は役に立つから働かせよう	女性の主体性を尊重しよう	性別をめぐる社会構造や制度を変革しよう

出典：百瀬 (2017) より筆者編集

2-2. ジェンダー主流化

1990 年代に入ると、国家の安全保障の対概念として「人間の安全保障 (Human Security)」が登場した。冷戦終了後の国際社会では、国家の解体や地域紛争の勃発、国内外避難民の増加や感染症の拡大、気候変動や大規模災害の発生など、従来の安全保障

の枠に収まらない地球規模の課題が顕在化し、深刻化していた。一国あるいは地域のみでの解決が容易ではなく、単位としての国家の強調が困難な中で、人に焦点を当て「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」を優先するために国連開発計画を中心に「人間開発」の概念が生まれた。人間開発は、開発の中心に人間を据え、個人の選択幅を拡大する営みこそが開発の本質であるとし、それまで中心にあった経済開発は、人間開発を構成する一要素と位置付けられた。開発レジームの転換が進む中、1995年の北京女性会議では、GAD イニシアティブの流れを汲んだ「ジェンダー主流化 (gender mainstreaming)」が提唱され、その後の開発とジェンダーの中心概念となっていく。ジェンダー主流化とは、「法、政策、プログラムなど、全ての分野やレベルの取り組みが及ぼす可能性がある女性と男性への異なった影響を検証する過程である。女性と男性が等しく恩恵を受け、不平等が固定化しないように政治、経済、社会のすべての分野の政策策定・実行・モニタリング・評価を含む一連のプロセスに女性と男性の関心と経験を投入する戦略である。究極の目的はジェンダー平等の達成である」¹⁾とする概念である。田中は、ジェンダー主流化を「開発援助においてジェンダー平等を推進するために、女性の参画を促進し、かつすべての関係者が、現在の組織的、制度的枠組みそのものを批判的に分析・評価し、再構築していく過程」[田中 2004 年、P.21]と説明しており、SfD におけるジェンダーを考える際にも取り入れるべき視角であろう。

開発や平和構築のみならず「従来では考えられなかった女性と子供の人身取引や、紛争下における女性に対する暴力、ジェンダーと多様性の観点からの災害復興などが実践・研究対象領域として拡大」[田中 2019 年、P.10]しており、「ジェンダー主流化をいかに普遍化させるか、ということはまだ途上のようなものである」[百瀬 2017 年、P.124]とされている。開発分野は、比較的早期にジェンダーの視点を取り入れ、国際社会の潮流に沿う形でジェンダーに関する検討を続けてきたため、制度や建付けとしての開発とジェンダーは整いつつあると言えるであろう。しかし、各国の歴史的、社会的、文化的、宗教的影響を考慮すると、現場のレベルでのジェンダー視点の採用は容易ではなく、今後も慎重かつリアリスティックに政策と実務の現場での議論を重ねていくことが重要である。

3. スポーツとジェンダー

3-1. スポーツとジェンダー研究

女性とスポーツの研究の中では、月経周期とコンディショニング、女性アスリートの三主徴 (Athlete Triad)²⁾、出産後の回復とトレーニングなど女性特有のスポーツ的課題が取り上げられている。近年では、競技成績と月経不順や無月経との関係や、疲労骨折、貧血、生理痛など女性の身体とスポーツに関する研究も進められている。

近年の国際スポーツ大会における「性別」の取り扱いに関する運動および研究も重要なテーマの一つである。南アフリカのセメンヤ選手の問題は、世界陸連の「男性ホルモンの

テストステロン値が高い女子選手の国際大会参加を制限する」³⁾とした規定の撤回を求めて、スポーツ仲裁裁判所とスイス連邦最高裁に持ち込まれたが、いずれにおいてもセメニヤ選手の訴えが棄却された。2020年9月に行われた「2020 横浜スポーツ学術会議」では“Gender Binary and Hyperandrogenism Regulation in Sport”と題したシンポジウムが行われ、性別確認検査のホルモン値によって性を規定された複数の選手が、競技から排除されている実態を明らかにした。残念なことに、今まさにこのような問題が起こっている事実は、スポーツ科学研究者や陸上競技関係者の間でも広くは認識されていない。

ホール [2001] は、スポーツとジェンダー研究の分析手法を、①カテゴリー的研究、②配分的研究、③関係論的分析の3つに分類した。カテゴリー的研究とは、スポーツへの参加の実態や競技成績などの「性差や人種差を数量化し、それを経験論的に研究する」[ホール 2001 年、P.23] 手法である。筋力やスピードといった身体能力のみでなく、参加の動機付け、緊張、没頭といった心理面も含めた生物学的差異に着目するものであり、「こうした研究が注意を向けるのが、女性や男子、黒人と白人、先住民と非先住民といったカテゴリー間の差異であり、こうした差異を生物学や社会化を通して説明」[ホール 2001 年、P.24] するものである。

配分的研究とは、スポーツにまつわる資源の分配比率の検証、すなわち「メディア、スポンサー、コーチ、競技の機会などの配分を吟味する」[飯田 2018 年、P.194] 研究であり、男女の不平等の実態を示すことによりスポーツ界に変革を促し、女性のスポーツ環境を改善する役割を果たしてきた。一方で、「性別間の不平等を暴くという意味では有用だが、なぜその不平等が生じるのかは明らかにされていない」[飯田 2018 年、P.194] と指摘されるように、資源への不均衡なアクセスを決定づける社会的、文化的背景やシステム上の矛盾については、ケースバイケースとして軽視されたり、改善が困難なものとして黙認される傾向にあった。

関係論的分析とは、「スポーツというものが、社会内の権力集団の利益と必要に役立つように歴史的に生み出され、社会的に構築され、文化的に規定されているという仮定から出発する」[ホール 2001 年、P.24] もので、「ジェンダーには自然な差異があり、女性は劣っているのだというイデオロギーを構築するための装置、制度として、近代スポーツは男性たちにより形作られてきたとする考え方」[飯田 2015 年、P.14] に基づく。身体的な男女の差異は「自然」であるが故に、例えば、男女の種目やルールなどの違いは「当然」とされているが、「男性がそのパフォーマンスで優る（ように見える）のは、そもそもそのルールが筋力や瞬発力など男性の特質に合わせてデザインされているからに過ぎない（中略）。〈また〉見かけ上の男性身体優位がそのまま男女間のジェンダー格差を担保する根拠とされがち」[岡田 2010 年、P.7] であり、スポーツへの女性の参加が忌避されるのは、「生物学的な意味からではなく、文化的な意味」[Hargreaves 1994, P.217] からであると分析される。加えて、近代スポーツが「現実の多様で連続した性を無視し、男女どちらかのカテゴリーに分割」[飯田 2015 年、P.17] することを自明視する弊害も生み出している。

3-2. ジェンダー・トラブル

バトラー [1990] は、生物学的差異すなわち「セックス」も「ジェンダー」に規定されるとする『ジェンダー・トラブル』を発表した。バトラーが提唱したパフォーマティブ論は、ジェンダー研究を大きく塗り替え、様々な方面に影響を与えたと言われており [竹村 2003 年]、飯田の言う「多様で連続した性」と「スポーツ」の関係論的分析を補強したのみでなく、カテゴリー的研究や配分的研究の前提を覆した。稲葉 [2005] が「スポーツにおける『体力』や『能力』に見られる性差について、それが後天的に獲得・拡大される要素も含まれているばかりか、『体力』『能力』の差異とはあくまで個体差であって、性別には還元されえない」[稲葉 2005 年、P.60] と説明した構築主義は、細分化したスポーツとジェンダー研究に通底する「性」と「身体」の捉え方を問い直した。

2016 年のリオデジャネイロ夏季五輪では、女性の参加可能競技が初めて男性と同数の 28、参加選手の女性比率は 48.5% となり、「先進諸国を中心に」という条件がつくが、出場者数だけをみると男性とほぼ同程度に近づきつつあった。しかし、コーチや役員などの比率の低さ、セクシャル・ハラスメント問題、ライフスタイルの変化によるスポーツ実施機会の減少など女性に多くみられる種々の課題が明らかになっており、さらには、欧米を中心にスポーツとセクシュアリティの研究が進み、「スポーツに設けられてきた性別という境界線が次第に『線』としての体裁や意味を持たない場面があることもうかがえるようになった」[日本スポーツとジェンダー学会 2016 年、P.2]。近年のセクシュアリティ研究では、LGBT や性的マイノリティのスポーツを議論するのみでなく、それまでの女性とスポーツを考える基盤であった性別二元論を問い直し、スポーツとジェンダーの関係性を異なる視角から分析したことから、意図せずともスポーツの背後にあるマイノリティの周縁化や新植民地主義的性質といった不可視化された面を炙り出した。近年のスポーツとジェンダー研究は、「女性のスポーツ」の域を脱却し、「既存のスポーツ構造を批判、解体し、どうすれば『すべての女性、そして人々』が暴力や抑圧、差別に晒されず、自由に参加できるスポーツ文化を構築することができるのかを問い続けること」[井谷 2018 年、P.177] にまでその射程を広げている。

その後も国際社会のセクシュアルマイノリティの権利運動とリンクしながら、スポーツとセクシュアリティに関する研究が増加し、メディア表象の分析を通した「見る－見られる」の議論も行われている。これまで一般的に考えられていた「見る男性」と「見られる女性」の関係のみでなく、「消費し『見る』女性、『見られる』男性が広がっている」[山口 2010 年、P.39] といった新たなテーマも扱われており、スポーツ自体が現代社会のセクシュアリティの議論に示唆的であると言える。稲葉は、これらの研究の進展を「スポーツにおける異性愛主義体制に対して正面突破を図ることや、また体制の『外部』にユートピアを求めることにはつながらず、いわば体制の『内部』からの『攪乱』を志向するオルタナティブな視角」[稲葉 2005 年、P.65] によるものと説明した。オルタナティブで新しい視角であるがゆえに様々な異論も見られたが、「ジェンダー／セクシュアリティ研

究が不可分であること、および身体を考察することの重要性を再認識させるという機運を促し、多くの領域に影響」[岡田 2010 年、P.12] を及ぼしている。SfD は、この影響を受けた領域の一つとみなすことが可能であり、近年、若手研究者を中心に SfD とジェンダーに関する研究が急増している。

3-3. 男性性の保護区としてのスポーツ

スポーツの男らしさの表現体としての機能や優位性の再生産装置としての役割もフォーカスされた。「スポーツは、男性を主体とし、女性を従属させるという社会の性役割を確認し、それを再生産する装置となっている」[笹沼 2005 年、P.52] という指摘に加えて、「女／男の二元的区分は偶発的かつ恣意的であり、異性愛主義を再生産する権力をはらんでいる」[井谷 2012 年、P.42] と「正当性の誇示」や差別につながるスポーツの「権力」への論究もなされている。

ダニングは、1999 年の『Sport Matters (問題としてのスポーツ)』において、直接的かつ身体的な暴力が容認されない現代社会において「いくつかのスポーツ—軍隊や警察のような職業とともに—は男性的攻撃性の合法的な表現のための、肉体的勇気や力の使用と誇示をともなう伝統的な男性のハビタスの生産と再生産のための飛び地を代表する」[ダニング 2004 年、P.407] として、男性性を証明し、強化する手段としてのスポーツの存在意味を示した。海妻 [2019] は、「男性性の保護区」や「有害な男らしさ (Toxic Muscularity)」の議論を踏まえた上で、近年の市場競争の激化の中で「スポーツを軍務以外の『競い合う上で有用な身体』の獲得経験」[海妻 2019 年、P.44] とみなし、スポーツが経済的競争力を身につける労働者（および予備軍）の学びの場とされる様を考察している。また、スポーツが「消費社会におけるビジネスの対象として巨大化していることは、一方でスポーツに内在する男性優位神話を見直す視点を持ち難くさせ（中略）、つまり、『スポーツは男性優位のままであった方が利益を生む』という循環によって、スポーツと男性性の結びつきを温存し続けている」[岡田 2012 年、P.53] 点も看過できない。

セジウィック [1985] は、男性同士の絆＝ホモソーシャルが、ミソジニー（女性蔑視）とホモフォビア（同性愛嫌悪）をベースにした強固なつながりであり、「実際には近代社会においても、そしてスポーツの世界ではより苛烈に、同性愛者は差別の対象となり続けて」[岡田 2012 年、P.53] いることから、スポーツが男性を中心に女性を周縁化するという単純な構図では説明できず、権力、差別、格差を容認し、再生産するという認識の必要性を説いている。この点については、スポーツが、人の生物学的な違いに優劣をつけたり、「身体を可視化する文化装置であるならば、身体の多様性の認識が広がるにつれ、その多様性を『可視化』することも可能ではないのだろうか」[坂 2020 年、P.166] とも言われている。スポーツとセクシュアリティ研究と並行して、スポーツが内包する「力」を見つめ直すことで、広く身体に関わる不公正の構造を提示できるのではないだろうか。

4. 開発のためのスポーツにおけるジェンダー

4-1. SfD とジェンダー

「開発のためのスポーツ (Sport for Development: SfD)」の歴史は古い。SfD が開始された時期を明示することは困難であるが、例えば、アフリカに旧植民地国を有する欧州諸国は、長年、一流競技者の受け入れやコーチの派遣、施設整備などの活動を行っており、「コモンウェルスゲームズ」⁴⁾に関わる支援などが最たる例である。これらの支援は、ここ 20 年程の間に「国際協力」の文脈に落としこまれ、SfD、あるいは「開発と平和のためのスポーツ (Sport for Develop and Peace: SDP)」として認識されるようになった。SfD を行う NGO を検証した鈴木ら [2015] は、2000 年代後半以降を SfD の「主流化期」と位置づけ、『『現場から政策へ』から『政策から現場へ』の還流が見られ、量的拡大を促す好循環期に入った』[岡田 2015 年、P.107] と評価している。

SfD の拡大傾向の中でジェンダーを取り上げたのは、Meier[2005] が最初であろう。Meier は、スイスの開発機関 “Swiss Academy for Development” でスポーツを担当し、初期の SfD 分野の確立を担った一人である。図 1 のように SfD とジェンダーの関係を整理し、特に “4. Gender equity, sport and development” と “5. Socio-cultural context” の項において重要な分析を行っている。1990 年代から開発途上国においても女性のスポーツへの参画が急増したが、実際には「現場の声を聴く」という開発の潮流との相克もあり、Social Elite と呼ばれる特定の女性のみの話に留まっていた。そこで、SfD の現場では、スポーツにおけるジェンダー平等 (Gender Equality) を目指すのではなく、スポーツを通じてジェンダー公正 (Gender Equity)⁵⁾ を目指すより現実的な路線が目指された⁶⁾。女性のスポーツ参加の実現のみではなく、SfD のイニシアティブのひとつとしてジェンダー公正が位置づけられたものである [Sancar et. al. 2005]。

Meier は、先進国で展開されていた議論を踏まえた上で、「ジェンダー公正を目指す持続可能なスポーツプログラムを行うにあたっては、資源へのアクセスと活用、力のダイナミクス、様々な性別役割を含んだその地の特有の社会経済的、文化的要因を考慮に入れなければならない」[Meier 2005, P.8] と述べており、複数の事例を提示しながら、地域差と経済差を抱えた SfD の現場でのジェンダー公正の実現の困難さを示している。

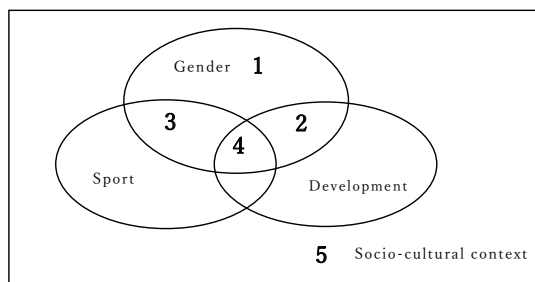


図 1 Gender、Sport and Development

出典 : Meier[2005] P.5

4-2. SfD におけるジェンダープログラムの増加

2000 年代後半から 2010 年代は、SfD の拡大が継続した時期であった。量的な拡大傾向にあったため、①援助する側の論理の優先、②メガイベント依存による機会の偏在、③スポーツの過度な「ツール化」、④サッカーへの偏重などが指摘され[鈴木ら 2015 年]、加えて、活動地の約 52%がアフリカの国々で [Levermore et. al. 2009]、活動の多くが男子・男性を中心に展開され、女子・女性はバランスをとるために参加するに過ぎなかったことが問題視されてきた。SfD の初期から実務と研究に関わる Giulianotti [2011] は、スポーツがその地の文化や社会の関係性の影響を多分に受け、内在する力の不均衡がそのまま SfD プログラムに反映されることに言及している。この時期の開発分野では、地元の声の反映や参加型開発が全盛だったこともあり、SfD プログラムに地域の「ジェンダー観」が色濃く映し出される状況であったことは想像に難くない。

一般的な開発が経済発展を目指す中で、女性対象の SfD 活動で実現すべきことは、保健衛生啓発やリプロダクティブヘルス、若年結婚や妊娠の防止などへとシフトしていった。また、抑圧され、保護すべき対象である女性たちに対して、“Safe Space”として安全なスポーツの場を提供する活動もみられた [Spaaij et. al. 2014]。これらには「ジェンダー規範にチャレンジすることによって、『普通』とされ／存在しているものを覆したり、スポーツを超えて社会を変革する力を持つ」[Saavedra 2009, P.127] ことが期待されたが、SfD における女性は、スポーツ参加によって「エンパワーメント」されるべき「被害者」という言説と共に第三波フェミニズムに利用された [Chawansky 2011] とも考察されている。したがって、ジェンダーの名のついた SfD の多くは、①社会的弱者である女性を保護し、男性と同等のスポーツの権利を確保する、あるいは②性別役割分業に基づく女性の役割へのエンパワーメントを促すものに留まり、SfD における女性は、性別を問わないプログラムに参加を「許される」存在か、女性のみを対象としたプログラムにおいて「エンパワーメントされる」存在かのいずれかに過ぎなかった [Chawansky et. al. 2016]。

女性を対象とした SfD の成果が検証される一方で、既存の SfD 実践におけるジェンダー平等も主な研究関心であった [Pelak 2005, Forde 2008, Saavedra 2009]。ホールの分類では配分的研究にあたり、開発分野の GAD やジェンダー主流化の流れの中で、男性性を強く帯びた「スポーツ」を用いる際に、ジェンダー視点の導入が必須であることが強調された。しかし、ジェンダー視点の導入とは、女性が男性と同じように SfD 活動に参加することではなく、ましてや SfD 実践の中で男性と女性が共にプレイをすることではない。さらに言えば、女性が男性的な「スポーツ」を用いたプログラムに参加してエンパワーメントされたとしても、地域や家庭に戻った際に、その成果を活かす機会はほとんど訪れないことが多い。SfD の実施がジェンダーにまつわる問題を浮き彫りにはしたものの、その解決の責任を女性へと固定化し、刻印する性質を有しており、SfD とジェンダーの組み合わせ自体が論理的矛盾と構造的限界を有している [Oxford 2017] とも考察された。

4-3. 研究の進展

SfDにおけるジェンダーは、全ての活動の基盤となる概念や「平和構築」のような近接分野とはみなされておらず、「健康」「子ども」「障がい者」などと並ぶイシューや対象のひとつであった[SDP IWG 2008]。したがって、SfDにおける「女性のためのプログラム」や「プログラムへの女性の参加」の検証が SfD 研究の一角で行われていたもののそれらは SfD 内に留まるものであり、スポーツ科学や開発学、ジェンダー研究への貢献は意識されてこなかった。しかし、2000 年代に入ると蓄積されてきた事例研究を一般化する動きが活発になり、社会的現象としての SfD が、社会システム論 [Massy et. al. 2015]、アクター・ネットワーク論 [Darnell et. al. 2018]、サーバント・リーダーシップ論 [Peachey et. al. 2017] などを用いて検証され始めた。

Hayhurst et. al.[2018] は、ポストコロニアル・フェミニズム論に依拠して SfD プログラムの分析を行い、新植民地主義的な性質を有する SfD が、開発プログラムとして十分な社会的・経済的なインパクトを産み出していないと指摘した。ネオリベラルな視点から SfD を分析した Donnelly[2011] の論を支持して展開されたもので、スポーツを開発手段として用いることの是非をジェンダーの視点から問い直した画期的な論である。帝国主義や新植民地主義とスポーツのリンクは、すでに周縁化されている人々をさらなる周縁へと追いやる [Sykes 2017] 性質を持ち、また、「われわれの社会は近代の長きを通じて、すでにその性機構を基盤としたシステムを築いており、その価値観から自由になることは簡単ではない」[岡田 2010 年、P.15] と言われている。このダブルバインドを悲観的に捉えれば、SfD へのジェンダー視点の導入や、もとより近代スポーツを開発手段とすることの矛盾から逃れられないが、楽観的に考えれば、スポーツそのものの内包する「開発的な負の側面」への対処がスポーツの新たな形態の模索へとつながるかもしれない。Hayhurst et. al.[2018] は、「ポストコロニアル・フェミニズムというレンズを通じて現代の国際政治の理解を深めていくことは、ジェンダーや人種、階級、そして国の間の交差についてより敏感で、包摂的で、注意深い、豊かな洞察を通じて SDP のストーリーを『書き換える』一助になるかもしれない」[Hayhurst et. al. 2018, P.602] として、SfD とジェンダースタディーズが相互補完的なレンズとなる可能性と、レンズを通した分析が国際社会のローポリティクスに貢献する可能性を示唆している。

宮脇 [2013] は、私たちの暮らす地の『世界観』自体が男性人類学者によって、現地社会の男性のインフォーマントから聞き取られた、きわめて男性中心主義的な構築物[宮脇 2013 年、P.43] であると述べている。極端に言えば、SfD はその地の「世界観」を臆面なく表出させるスポーツを用いてその世界観を正当化し、拡大や浸透に手を貸す活動とみなすことができる。SfD にジェンダー視点を導入するためには、女性中心主義的なスポーツや世界観があり得るのか否かを明らかにし、あり得ないのだとしたら、開発手段としてスポーツを用いる是非や、SfD 分野がジェンダー規範に挑む必要性が慎重に検討されるべきであろう。

5. おわりに

本研究では、主に女性を中心に据えて「開発とジェンダー」「スポーツとジェンダー」「SfDにおけるジェンダー」に関わる研究を整理してきたが、言うまでもなく男性やLGBT、セクシュアルマイノリティもその射程の範囲内にある。「開発」「ジェンダー」「スポーツ」は、相互の結びつきが薄い形で発展してきたが、最近では、三者が接近してきていることを実感する。スポーツが社会を映す鏡といわれる理由の追究や、スポーツの場における抑圧の認識と解放への努力は、紛れもなく開発にもジェンダーにも重要なトピックであるが、未だ緒に就いたばかりで、今後の議論の深まりが期待される。

近年の SfD におけるジェンダー研究は、SfD そのものの存在意義を問う意味も有しているが、一方で「女性やセクシュアルマイノリティや障害者は、いままスポーツ界で差異化され周縁化されているが、政治、文化、経済などジェンダー以外の要因が複合的に絡まり、スポーツ界のジェンダー配置が複雑化している」[山口 2010 年、P.50]との指摘もある。本研究を通じて、スポーツとジェンダーの関わりが複雑化している中に SfD を持ち込む性急さを再認し、自制的な対応を検討することが不可欠であると考えている。また、より広くスポーツとセクシュアリティ、人種差別、新植民地主義との関係性を問いかけることは、開発におけるスポーツを考える上でも、開発途上国でも適用可能なスポーツの固有の価値を考える上でも重要であろう。

誰のためのスポーツなのか、何のためのスポーツなのかを現場ごとに問い直すこと、盲目的にスポーツの効用を謳ったり、女性の参加を推進したりするのではなく、背後にある社会的文脈へのスポーツの影響を吟味することは、今後の SfD の発展の鍵となるだろう。ジェンダー視点がその実行にあたって無二の価値を有していることは明らかである。

注

- 1) UN Economic and Social Council “Resolution 1997/2: Agreed Conclusions”
- 2) 女性アスリートの三主徴とは、低体重、無月経、骨粗しょう症が互いに連動して引き起こされる慢性的なエネルギー不足の状態である。
- 3) 時事通信社の 2020 年 9 月 9 日配信「セメンヤの敗訴確定 参加制限の新規定めぐり一陸上」より。<https://www.jiji.com/jc/article?k=2020090900631&g=spo> [2020/9/11]
- 4) コモンウェルスゲームズは、英連邦に属する国・地域が参加して行われる国際大会である。4年に1度、各地で開催されており、ネットボールやクリケット、スカッシュなど、主に英連邦諸国でプレイされている競技も含まれている。
- 5) ジェンダー平等とは、性別に関係なく全ての人々が等しく扱われることを意味し、「量(人数)」の平等である。分かりやすい例としては、様々な職階や役割における男女比を同じにしようとする考え方である。ジェンダー公正とは、性別の違いを考慮し、「等

しい」と感じられるように扱われることを意味し、「質」の上で同じになることを目指す考え方である。

- 6) 例えば、女性のためのプログラムの開始時間を家事の暇の時間帯にしたり、女性のコーディネーターやコーチによる指導が行われたりといった工夫がこれにあたる。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20H04076 の助成を受けたものです。

文献表

- アンホール著・飯田貴子・吉川康夫監訳 (2001), 『フェミニズム・スポーツ・身体』, 世界思想社
- 荒木菜穂 (2019), 「書評 現代日本のジェンダー・セクシュアリティをめぐる状況とこれからのフェミニズムについて考える：菊地夏野『日本のポストフェミニズム：女子力とネオリベラリズム』を読んで」, 日本女性学研究会編『女性学年報』第 40 号, 45-51 頁
- 飯田貴子 (2015), 「身体能力における性差再考：スポーツ・パフォーマンスを中心に」 女性学講演会 16, 1-20 頁 <http://hdl.handle.net/10466/14520> [08/09/2020]
- 飯田貴子 (2018), 「研究の視点と枠組み」 飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』, ミネルヴァ書房, 194-195 頁
- 石田洋子 (2019), 「ジェンダーの観点からみる途上国における教育開発：ジェンダー平等の取組の歴史的変遷、成果、課題」 広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター『研究成果報告書統一テーマ：平和と和解』, 113-123 頁
- 井谷恵子 (2012), 「JSSGS 第 10 回記念大会報告（シンポジウム）『ジェンダー研究のフロンティアスポーツにおける性別二元論の行方』」, スポーツとジェンダー学会『スポーツとジェンダー研究』第 10 巻, 40-44 頁
- 井谷聡子 (2018), 「〈新〉植民地主義とスポーツ」 飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』, ミネルヴァ書房, 176-177 頁
- 稲葉佳奈子 (2005), 「日本におけるスポーツとジェンダー研究のオルタナティブに向けて」, 日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』第 13 巻, 53-67 頁
- 上野千鶴子 (2013), 「フェミニズムとジェンダー研究」, 木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編著『よくわかるジェンダー・スタディーズ』, ミネルヴァ書房, 2-5 頁
- 岡田桂 (2010), 「ジェンダーを“プレイ”する：スポーツ・身体・セクシュアリティ」, 日本スポーツ社会学会『スポーツ社会学研究』第 18 巻第 2 号, 5-22 頁
- 岡田桂 (2012), 「スポーツにおける男性中心主義」 井上俊・菊幸一編著『よくわかるスポーツ文化論』, ミネルヴァ書房, 52-53 頁
- 岡田千あき (2015), 「国際社会における『開発と平和のためのスポーツ』の 20 年：我が国のスポーツ・フォー・トゥモロー政策の発展に向けて」, 大阪大学大学院人間科学

- 研究科『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』, 第 41 巻, 99-118 頁
- 海妻径子 (2019), 「日本『男性労働』社会のゆくえと『ロッカールームの会話』—格差・包摂・抵抗と Toxic Muscularity in Sports—」JSSGS 第 17 回大会報告 (基調講演), スポーツとジェンダー学会『スポーツとジェンダー研究』, 第 17 巻, 43-46 頁
- 国際協力機構 (2009), 『課題別指針「ジェンダーと開発」』, 国際協力機構
- 坂なつこ (2020), 「スポーツと『男性性の保護区』の変容」川本玲子編『ジェンダーと身体—解放への道のり—』, 小鳥遊書房, 150-171 頁
- 笹沼朋子 (2005), 「スポーツとジェンダー: 女性は何のために運動するのか」, 労働政策研究・研修機構『日本労働研究雑誌』, 52-53 頁
- 鈴木直文・岡田千あき (2015), 「スポーツを通じた国際協力の世界的動向」, 齊藤一彦・岡田千あき・鈴木直文編『スポーツと国際協力』, 大修館書店, 25-88 頁
- セジウィック著・上原早苗・亀澤美由紀訳 (1985), 『男同士の絆』, 名古屋大学出版会
- 竹村和子 (2003), 「"ポスト" フェミニズム」, 『思想読本』第 10 巻, 作品社
- 田中由美子 (2002), 「『開発と女性』(WID) と『ジェンダーと開発』(GAD)」, 田中由美子・大沢真理・伊藤るり編『開発とジェンダー—エンパワーメントの国際協力』, 国際協力出版会, 28-321 頁
- 田中由美子 (2004), 「国際協力におけるジェンダー主流化とジェンダー政策評価: 多元的視点による政策評価の一考察」, 日本評価学会『日本評価研究』第 4 巻第 2 号, 1-12 頁
- 田中由美子 (2019), 「『人間の安全保障』とジェンダー再考」, 日本学術振興会『学術の動向』, 第 24 巻第 6 号, 8-11 頁
- ダニングエリック著・大平章訳 (2004), 『問題としてのスポーツ—サッカー・暴力・文明化』, 法政大学出版局
- 中村唯 (2010), 「途上国開発におけるジェンダーと女性のエンパワーメント概念の構築—インドにおけるマイクロファイナンスの取り組み (女性自助グループ) を事例に—」, 日本国際政治学会編『国際政治』, 第 161 号, 110-123 頁
- 日本スポーツとジェンダー学会編 (2016), 『データで見るスポーツとジェンダー』, 八千代出版
- 宮脇幸生 (2013), 「世界観」, 木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編著『よくわかるジェンダー・スタディーズ』, ミネルヴァ書房, 42-43 頁
- モーザ キャロライン著・久保田賢一・久保田真弓訳 (1996), 『ジェンダー・開発・NGO—私たち自身のエンパワーメント』, 新評論
- 百瀬圭吾 (2017), 「戦後の国際社会における「女性の人権」の発見とそれに対する認識の変遷」, 日本ボランティア学会, 『ボランティア学研究』, 第 17 巻, 115-126 頁
- 山口理恵子 (2010), 「スポーツ・ジェンダー研究の『まなざし』について」, 日本スポーツ社会学会, 『スポーツ社会学研究』, 第 13 巻, 39-52 頁
- 来田享子 (2018), 「歴史とジェンダー『総論』」, 飯田貴子・熊安貴美江・来田享子編著『よ

くわかるスポーツとジェンダー』, ミネルヴァ書房, 12-13 頁

- Chawansky, M. (2011), New Social Movements, Old Gender Games? Locating Girls in the Sport for Development and Peace Movement. In Snyder, A. and Stobbe, S. (Eds.) *Critical Aspects of Gender in Conflict Resolution, Peace Building, and Social Movements*, Bingley: Emerald, pp.121-134.
- Chawansky, M. and Schlenker, M. (2015), Beyond Girl Power and the Girl Effect: The girling of Sport for Development and Peace. In Hayhurst, L., Kay, T. and Chawansky, M (Eds.) *Beyond Sport for Development and Peace: Transnational Perspectives on Theory, Policy and Practice*, London: Routledge, pp.94-105.
- Chawansky, M. and Kipnis, H. (2016), Gender politics in sport for development and peace. In Bairner, A., Kelly, J. and Jung W. L. *Routledge Handbook of Sport and Politics*, London: Routledge, pp.355-363.
- Darnell, S., Giulianotti, R., Howe, D. and Collison, H. (2018), Re-assembling Sport for Development and Peace through Actor Network Theory: Insights from Kingston, Jamaica, *Sociology of Sport Journal*, Vol.35-No.2, pp.89-97.
- Donnelly, P., Atkinson, M., Boyle, S., and Szto, C. (2011), Sport for Development and Peace: a public sociology perspective, *Third World Quarterly*, Vol.32-No.3, pp.589-601.
- Forde, S. (2008), *Playing by their Rules: Coastal Teenage Girls in Keya on Life, Love and Football*. Kifili, Kenya: Moving the Goalposts.
- Giulianotti, R. (2011), Sport, Peacemaking and Conflict Resolution: A Contextual Analysis and Modelling of the Sport, Development and Peace Sector, *Ethnic and Racial Studies*, Vol. 34-No.2, pp.207-228.
- Hargreaves, J. (1994), *Sporting Females: Critical Issues in the History and Sociology of Women's Sports*, London: Routledge.
- Hargreaves, J. (1997), Women's sport, development, and cultural diversity: The South African experience. *Women's Studies International Forum*. 20, pp.191-209.
- Hayhurst, L., MacNeill, M., Kidd, B., Knoppers, A. (2014), Gender relations, gender-based violence and sport for development and peace: Questions, concerns and cautions emerging from Uganda, *Women's Studies International Forum* Vol.47, pp.157-167.
- Hayhurst, L., Sundstrom, L. and Waldman, D. (2018), Post-colonial Feminist International Relations Theory and Sport for Development and Peace, In Mansfield, L., Caudwell, J., Wheaton, B. and Watson, B., *The Palgrave Handbook of Feminism and Sport, Leisure and Physical Education*, London: Palgrave Macmillan, pp.589-607.
- Levermore, R. and Beacom, A. (2013), International Relations and Sport In Maguire, J. (Eds.), *Social Sciences in Sport*, IL: Human Kinetics, pp.219-246.
- Levermore, R. and Beacom, A. (2009), Sport and Development: Mapping the Field. In Levermore,

- R. and Beacom, A. (Eds.) *Sport and International Development*, New York: Parglave Macmillan.
- Massey, W., Whitley, M., Blom, L. and Gerstein, L. (2015), Sport for Development and Peace: A Systems Theory Perspective on Promoting Sustainable Change, *Journal of Sport Management and Marketing* Vol.16(1/2), pp.18-35.
- Meier, M. (2005), *Working Paper: Gender Equity, Sport and Development*. Switzerland: Swiss Academy for Development.
- Oxford, S. (2012), Sport for Development and Peace: Gender as the Missing Link, MA Dissertation at University of Bradford. https://www.sportanddev.org/sites/default/files/downloads/oxford_sdp_gender_missing_link_dissertation.pdf [13/09/2020]
- Oxford, S. (2017), The Social, Cultural, and Historical Complexities that Shape and Constrain (Gendered) Space in an SDP Organization in Colombia, *Journal of Sport for Development*, Vol.6-No.10, pp.1-11.
- Peachey, J. and Burton, L. (2017), Servant Leadership in Sport for Development and Peace: A Way Forward, *Quest* Vol.69-No.1, pp.125-139.
- Pelak, C. F. (2005), Negotiating gender/race/class constraints in the new South Africa. *International Review for the Sociology of Sport* Vol.40, pp.53-70.
- Sancar, A. and Sever, C. (2005), *Sport and Gender, in Sport for Development and Peace*, Swiss Agency for Development and Cooperation.
- Saavedra, M. (2009), Dilemmas and Opportunities in Gender and Sport-in-development, In Levermore, R. and Beacom, A, and England, HS (Eds.), *Sport and International Development*, New York: Palgrave Macmillan.
- Spaaij, R. and Schulenkorf, N. (2014), Cultivating Safe Space : Lessons for Sport-for-Development Projects and Events, *Journal of Sport Management*, Vol.28-No.6, pp.633-645.
- SDP IWG (2008), *Harnessing the Power of Sport for Development and Peace: Recommendations to Governments*, Toronto: Right to Play.
- Skyes, H. (2017), *The Sexual and Gender Politics of Sport Mega-Events: Roving Colonialism*, London: Routledge.
- United Nations Development Programme (2016), *Africa Human Development Report* Retrieved from <https://www.undp.org/content/undp/en/home/librarypage/hdr/2016-africa-human-development-report/> [19/09/2020]

The Conjunction of International Development, Sports, and Gender

Chiaki OKADA

The concept of Sport for Development (SfD) was developed in the late 20th century. In Japan, the discussion about the contribution of sports to the Sustainable Development Goals (SDGs) began along with the planning for the Summer Olympics and Paralympics 2020 in Tokyo. This discussion is important considering the new role of sports in the post-COVID-19 society. Although it is said that sports can play various roles in the context of SfD, more rigorous verification is needed to understand the significance of sports at the societal, community, organizational, and individual levels.

The involvement of women in international development has been growing in many sectors. United Nations Secretary-General Ban Ki-moon said in 2015: “We cannot achieve our 2030 Agenda for Sustainable Development without full and equal rights for half of the world’s population, in law and in practice.”

However, the author has not previously paid attention to grasping SfD matters from gender perspectives, which may be related to the different meanings of gender bias (related to identity crisis) or the excessive attention to the other social minorities related to ethnicity, economic poverty, disaster victims or starvation. Although I have ignored my lack of attention to gender perspectives, at the same time, both in field activities and in research, I have questioned why most of my colleagues were cheerful, confident, and male sports persons or male development workers. In the meantime, as my research progressed, I wondered about the necessity of “exposing some of the racialized, classed and gendered silences and invisibilities evident in SDP scholarship and practice” (Hayhurst et al., 2018). The thematic areas of “international development and gender” and “sports and gender” have received significant attention in research during the past 20 years. However, looking back at the research on the sociology of sports, gender studies, and development studies, the inclusion of gender perspectives in SfD research is still uncommon. This study examines the conjunction of international development, sports, and gender by evaluating several related hypotheses, setting the Hayhurst (2018) discussion as a focal point, to clarify the vision for the upcoming analysis of field data. Another focus is the inherent power of sports as a tool for development from a gender perspective.